

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

親子の信頼関係を深める 「コーチング」

学校でも、会社でも教えてもらえない
コミュニケーションの技術を、ぜひ
使ってみませんか？



ご視聴は二次元コードから

師走に想う—3人の子—

師走の声を聞くと教育現場でも懐かしさが
増してきますが、私は、小学校に勤務していた
ときに接した3人の子どものことが脳裏に浮か
んできます・・・



続きは二次元コードから

気づきが得られる 学びの動画！

ニッケ教育研究所

理事長 **楠本 景央** 氏



スマホで読める 感動のコラム！

ニッケ教育研究所

顧問 **勝本 孝夫** 氏

元・大阪市立榎本小学校校長
元・大阪市立姫里小学校校長



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で
是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

子どもたちがこれから生きていく社会で必要とされる力を、「特別な力」ではなく「普通のこと」として身につけていくことが大切だと感じています。世の中には様々な背景を持った人たちがおり、違いを認め合い、人と協力すること、自分の考えを伝えること、困ったときに助けを求めること——これらは、未来を生きるうえで欠かせない力です。安心して挑戦できる環境や、つながりの中で学べる場を意識して整えていくことが、私たち大人の役割だと思います。そして、その「普通」を育てるためには、大人たちが未来志向の価値観を大切にし、日常の行動で示していくことが重要です。学校・家庭・地域が同じ方向を向き、共に学び続ける姿そのものが、子どもたちにとって何よりの学びになります。私たちは、そうした「人を思いやること」が当たり前として根づく社会を、次の世代へ手渡していきたいと願っています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティ・・・

特集

未来につなぐ学校づくり 第9回
「普通」が輝く学校へ
～ あたりまえの力が未来の礎となる ～

私がつくる子どもの笑顔 第20回
すべての子どもの学習権を
保障する学校をめざして

連載コラム

“子どもの幸せ”を教育のど真ん中に①

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真はルツェルン（スイス）です



子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくことになります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。

第9回は、大阪市立新生野中学校の小笠原忠承校長です。

第9回

「普通」が輝く学校へ

～あたりまえの力が未来の礎となる～

《大阪市立新生野中学校》 おがさわら ただつぐ 小笠原 忠承 校長

本校は生野区の東に位置し、1961（昭和36）年に東生野中学校の分校として開設され、1963（昭和38年）に分離・独立しました。地域に根ざした学校として親しまれ、脈々と受け継がれてきた校風と伝統を大切にしています。また、校訓「たくましい心身を」「創造のよろこびを」「誠実な日々を」の精神を基に、生徒の豊かな心の育成をめざして教育活動に取り組んでいます。2025年10月1日時点での全校生徒数は302名です。



学校教育目標

違いを認めあい、高めあい、響きあう生徒の育成をめざす

めざす生徒像

- 将来の夢や目標に向かって努力できる生徒
- 仲間を大切にする生徒
- 社会の一員となれる生徒

「普通」が輝く学校をめざして

誰にでもできることを、誰にもできないくらいきちんとやる。それが一流だ。

特別なことをするために、特別なことをするんじゃない。普通のことをバカにせず、しっかりすることが大事。

これは、私が日々大切にしている言葉です。

特別なことをしなくても、だれかを照らすことはできます。あいさつをする、話をきちんと聞く、仲間を思う。そんな「普通」の行動の中に、学校の本当の輝きがあると信じています。本校では、日々の“あたりまえ”を大切にし、「普通」が輝く学校づくりをめざして歩んでいます。

「普通」と聞くと、どこかあたりまえで、目立たない印象を持つかもしれません。けれども、日々のあいさつ、時間を守ること、仲間と協力すること。どれも実はとても大切です。これらは誰にもできるようでいて、決して簡単ではありません。誰かが落ち込んでいるときに声をかける、困っている友だちに手を差し伸べる。そんなひとつひとつの行動が学校を明るくし、安心できる場所してくれます。私は「普通」は決して“ありふれたもの”ではなく、“人の心を繋ぐ力そのもの”だと思っています。

朝、正門で交わされる「おはようございます！」の声。教室で授業を受ける姿。行事に全力で取り組む生徒たち。その裏で準備を進める生徒たちや、掃除で黙々と床を掃く姿。どれも特別なことではありませんが、光をあててみると、どの「普通」の中にも輝きがあることに気づきます。その輝きを互いに見逃さず、認めあい、高めあい、響きあうことができる学校。それこそが「普通」が輝く学校なのだと思います。



朝の登校風景

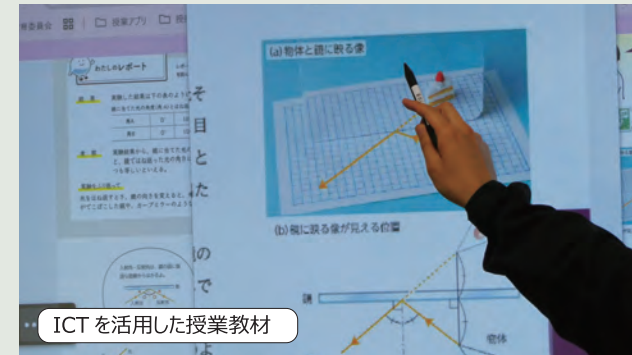
信頼の空気を生み出す

教職員もまた、日々の授業や会話、ちょっとした声かけの積み重ねの中で、生徒とともに成長しています。「大人が変われば子どもが変わる」という言葉の通り、まず私たち教職員が明るく、楽しく、穏やかに、そして前向きに学ぶ姿勢を持続することが大切です。生徒たちは、私たち大人の姿をよく見ています。教職員が笑顔でいきいきと働く姿は、子どもたちにとって

最高の「生き方の教材」です。だからこそ、私は「教職員が働きやすい職場環境を整えることが第一」と考えています。教員が安心して授業に打ち込める環境を整え、互いに支えあい、感謝しあえる関係を築くことが、学校全体のあたたかさや信頼の空気を生み出します。

普通になってきた ICT

本校ではこれまで、ICT機器の活用が十分に進んでいるとは言い難く、授業での活用も一部の教員に限られていました。機器の整備や操作スキルにも課題がありましたが、このたび「電子黒板実証のモデル校」に選定されたことで、新たな一歩を踏み出すことができました。この機会は、学びを支える教育環境の充実に向けた大きな転機となります。電子黒板の導入は、単なる設備の整備にとどまらず、授業そのものをよりわかりやすく、より対話的なものへと変えていく力を持っています。生徒が自ら考え、意見を伝え合う——そんな主体的な学びを支えるツールとして位置づけていきたいと考えています。



ICTを活用した授業教材



ICTを活用した授業風景

今後は、教員ひとりひとりが使いながら学び合い、互いの工夫を共有することで、学校全体の授業力の向上につなげていきます。そして、ICT機器を「特別なもの」ではなく、「日常の授業の中に自然と息づくもの」として根づかせていくことをめざします。

普通の中から生まれる輝き

今年度の私が掲げた目標の漢字は「輝」です。「本校が何かで1番輝くように」という願いを込めました。62期生（現3年生）も、同じように思いを込めて一文字の目標を立ててくれています。誰かを照らすとする優しさが、やがて自分自身の輝きとなり、学校全体を明るくしていきます。

「輝」とは、特別なスポットライトの中で光るものではありません。それは日々の「普通」の中から静かに生まれ、やがて周囲を照らす光です。その小さな光が集まることで、学校全体を照らす大きな光となるのだと、私は信じています。



おわりに

昨日までの「普通」が、今日はもう通用しない。AIが文章を書き、天気は極端に変わる——社会環境が急速に変化する中で、「特別な力」や「成果」が注目されがちです。けれども私はその土台にある「普通」の力こそ大切にしたいと考えています。日々を誠実に生きること、他者を思いやること、自分を信じて前に進むこと。そうしたあたりまえの力を育てることこそ、



今年の抱負 漢字一字

未来を生きる生徒たちの礎になると信じています。その「普通」を支えるのは、子どもたちを見守り、励まし、ともに歩む大人の存在です。これからも「普通」の中にある光を見つめ、ひとりひとりが自分らしく輝ける学校づくりを続けていきます。そしてそんな小さな光の輪が、やがて市全体の教育を明るく照らすことを願っています。

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。

第20回は、大阪市立大空小学校の清水高志校長です。

第20回

すべての子どもの学習権を保障する学校をめざして

しみず たかし
《大阪市立大空小学校》 清水 高志 校長

大空小学校（大阪市住吉区）は、南住吉小学校の大規模校解消を目的として、2006年4月に開校しました。本年度で創立20周年を迎え、全校児童は222名です。小規模校ながら、「みんながつくる みんなの学校」を合言葉に、地域・保護者・学校が一体となって、「4つの力～人を大切にする力、自分の考えを持つ力、自分を表現する力、チャレンジする力」の育成に取り組んでいます。



学校の理念

すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる

学校教育目標

国際社会に生きる力を育てる
ともに生きる力を育てる 学び続ける力を育てる

育てたい
「4つの力」

人を大切にする力

自分の考えを持つ力

自分を表現する力

チャレンジする力

創立 20 周年を祝う会

6月7日（土）、創立20周年記念行事を開催しました。午前中の記念式典では、児童からのお祝いメッセージや卒業生（現役リーガーなど）からのビデオメッセージが紹介されました。また、5・6年生による記念コンサートが行われ、温かい拍手に包まれました。その後、本校の特色ある活動の一つである「ワイドオープン講座（出前授業）」を全学年14講座で実施しました。地域の方や保護者が講師となり、ものづくり、文化、科学など多彩な内容で授業を展開。20年の歳月を経て育まれた、世代を超えるつながりの大切さを改めて感じる一日となりました。

午後からは地域と保護者が中心となり、20周年記念イベント「大空20祭」を開催しました。240名を超える関係者が参加し、歴代校長によるトークイベントや20年間の歩みをまとめた映像の上映、未来へのメッセージづくりなど、学校への感謝と愛情に満ちた記念行事となりました。



創立記念コンサート

企業と連携した探究学習 ―アルバモス大阪との出会い―

これからの社会を生きる子どもたちには、自ら課題を見つけ、仲間と協力して解決していく力が求められます。本校の6年生は、OEN（Osaka city Education Network）と協働し、プロハンドボールチーム「アルバモス大阪」と探究学習に取り組みました。

子どもたちは、選手やマスコットキャラクターとの出会い、そして実技体験を通してハンドボールの魅力を感じました。その魅力を広めるために、「選手紹介」「SNS（音声出演）」「応援グッズ制作」「ハーフタイムショー企画」「イラスト」「クイズ」「配布物」「校内広報」の8チームに分かれて意見を出し合い、企画内容

テーマは…

「アルバモス大阪に考えた企画を提案しよう」

～ホーム開幕戦に向けて、ハンドボールやアルバモス大阪の魅力を発信しよう～

をまとめました。大阪市総合教育センターでは、選手やチーム担当者を前にプレゼンテーション実施。さらにホーム開幕戦では、子どもたちの手書きリーフレットが来場者に配布され、提案したイラストが試合会場に展示されるなど、学びを形にする体験をしました。自分の思いが社会につながる喜びと達成感を味わうことができ、子どもたちにとって大変貴重な学びとなりました。



オープン講座〈出前授業〉

ホーム開幕戦での展示

Birthday メッセージ集会

毎月第2水曜日には、その月の誕生日の児童をお祝いする「Birthdayメッセージ集会」を開いています。ピアノ演奏の『Happy Birthday』が流れると、誕生日の児童たちがステージの前に並び、『優しさの誕生日』を合唱します。その後、一人ひとりが「字をきれいに書きたい」「本をたくさん読みたい」など、今の思いや目標を発表します。6年間、毎年自分の気持ちを言葉にして伝える経験を積むことで、人前で話す力や相手の気持ちを思いやる力が育ちます。最後に学校長から一人

ひとりにバースデーカードが手渡され、花道を通って退場します。笑顔と拍手に包まれたこの集会は、大空小学校ならではの温かい時間です。



バースデーメッセージ

平和の尊さを未来へつなぐ学び ―大空平和学習―

10月15日・16日に、6年生は修学旅行で広島を訪れました。原爆ドームや平和記念資料館、平和公園を見学し、戦争の悲惨さと平和の尊さを肌で感じました。児童たちは気づいたことがあれば一生懸命メモを取り、平和を守る思いを自分の言葉で表現しました。さらに、平和セレモニーでは、平和と命の尊さに思いを馳せながら、原爆の子の像の前で『いのちの歌』を捧げました。

6年生は事前学習として「ピースおおさか」を見学し、大阪大空襲の被害についても学びました。また、被爆体験伝承者の講話では、教科書では伝わらない「生きた言葉」に心を動かされ、涙を流す児童の姿もありました。平和学習は、単に過去の出来事を学ぶことではなく、今をどう生き、これからの

社会をどう築いていくのかを考える大切な学びです。戦後80年を迎える今、戦争を体験した人が少なくなる中で、私たちは「語り継ぐ責任」と「考え続ける使命」を果たしていかなければなりません。そのことに気づかせてくれる学習となりました。



異学年で取り組む大空平和学習

広島での平和セレモニー

「4つの力」を育て合う時間 ―大空全校学習―

年4回、全校児童が縦割り班で話し合う「全校学習」を実施しています。テーマに沿って6年生がリーダーとなり、異学年の児童の意見を引き出しながら話し合いを進めます。自分の考えを持ちにくく、発表が難しい児童にも優しく声をかけ、意見が出るまで寄り添う姿には毎回心を打たれます。その後、リーダーが意見をまとめて全校児童に発表すると、次々と自然に手が挙がり、堂々と発表する6年生の姿は頼れるリーダーのロールモデルとなって、次の世代へと受け継がれています。



大空全校学習

おわりに

未来へつながる「みんなの学校」

大空小学校は、開校以来「すべての子どもの学習権を保障する学校」をめざして歩んできました。子どもたち一人ひとりが安心して自分を出し、学び、つながり合うことで、学校は少しずつ、着実に成長してきました。そこにはいつも、地域の方々、保護者、そして卒業生たちの温かいまなざしと支えがあります。

20年という節目は、これまでの歩みを振り返るとともに、次の世代へバトンを渡す大切な時でもあります。これからも「みんながつくる みんなの学校」という理念のもと、子どもたちの笑顔と学びがあふれる場を守り育てていきます。そして、大空小学校に関わるすべての人が「ここにいてよかった」「この学校があつてよかった」と感じられるような、温かい学校づくりを続けてまいります。

“子どもの幸せ”を教育のど真ん中に①

長年、教育の現場に身を置いてきた私は、「教育の目的は何か？」について考え続けてきました。言うまでもなく、教育は単なる知識の習得ではなく、人間としての成長と社会の持続的発展を両立させる営みです。では、教育の根源的な目的とは何でしょうか。私が導き出した結論は、「教育は“子どもの幸せ”のためにある」ということです。

《ニッケ教育研究所顧問》 かつもと たかお
勝本 孝夫

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）



忘れられない子どもたちの姿

小学校の校長時代、毎朝、登校してくる子どもたちを学校玄関で迎えることから一日が始まりました。
「校長先生、おはようございます！」
「校長先生、絶好調！」
暑い日も寒い日も、明るく元気に登校してくる子どもたちの姿を見るたびに、私はいつも心の底から願っていました。
——この子たちが、これからの人生を幸せに歩んでほしい。
——そのための土台を、この学校で教職員と力を合わせて築いていきたい。
こうした願いは日に日に強くなっていきました。なぜなら、出会ってきた数多くの子どもの中にも、支えを必要としている子どもたちがいたからです。学校に通うことに行きづらさを抱

えていた子、家庭の事情で十分な愛情を受けられなかった子、休み時間をいつも一人で過ごしていた子、そして笑顔の裏に寂しさを隠していた子……。私は、彼らに向き合うたびに自問しました。
——子どもは本来、幸せになるために生まれてきたのではないか。
——子どもが不幸を背負わずにすむような教育はできないのか。
——“子どもの幸せ”そのものを教育の中心に据える必要があるのではないか。
だからこそ、一人ひとりの姿は、今もなお私の心に深く刻まれています。

“子どもの幸せ”と学力

“子どもの幸せ”とは何か——それを一言で言い表すことは容易ではありません。なぜなら、その捉え方は人によって異なり、価値観も多様だからです。さらに、子ども自身の感じ方には、家庭環境や社会的背景などの影響も大きく作用します。しかし、教育現場に目を向けるとき、「子どもにとっての幸せとは何か」「教育はその幸せにどこまで関われるのか」という二つの問いは、教育に携わる者が避けて通れない根源的なテーマだと言えます。

「相対的な幸せ」と「絶対的な幸せ」

教員として多くの子どもたちに寄り添うなかで、私は「幸せ」には二つのかたちがあることに気づきました。それは、他者との比較から生まれる「相対的な幸せ」と、自分の内側から湧き上がる「絶対的な幸せ」です。

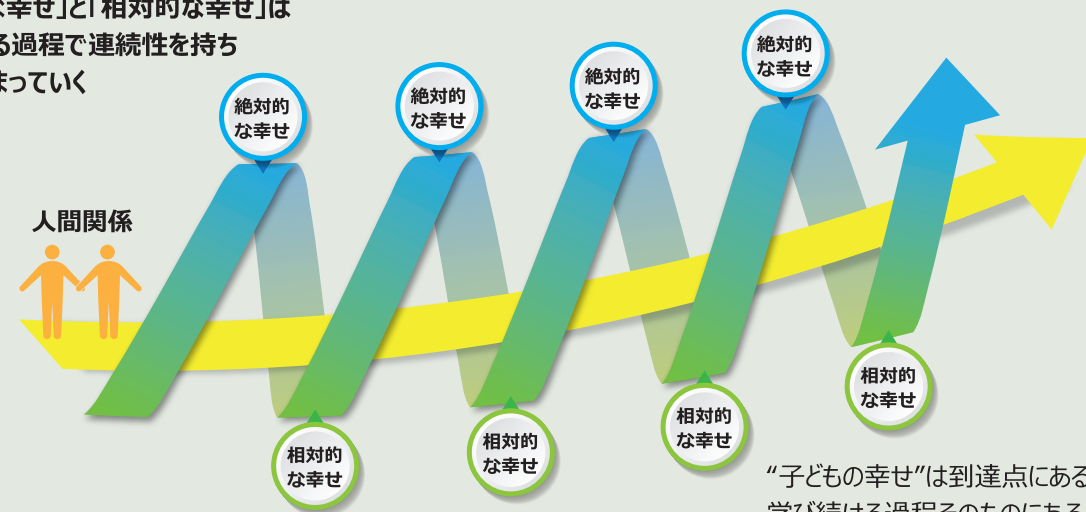
●**相対的な幸せ** 他者や環境との比較の中で生まれる幸せです。たとえば、「テストで友達より良い点を取った」「発表がうまく行って先生にたくさん褒められた」など、成果や評価を通して生まれる喜びです。基準が外部にあり、一時的で変動しやすい側面がありますが、努力が報われたという実感は自己肯定感を育てる大切な入口になります。教師が子どもの努力を適切に認めて具体的な言葉で伝えるとき、子どもの目が輝く瞬間が訪れるのです。

●**絶対的な幸せ** 比較や外部基準に依存せず、自身の内面から湧き上がる幸せです。たとえば、「苦手な計算をやり遂げたときの満足感」「励まし合いながら挑戦するときに感じ

る誇り」など、心が満ちている感覚です。目に見えにくいけれど揺らぎにくく、感謝・自己受容・精神的充足と深く関わっています。教師が「最後まであきらめずによく頑張ったね」と声をかけると、子どもは深い満足感に包まれます。まさに「自己成長の喜び」であり、幸せの質を高めるものです。

●**スパイラルのように作用し合う** この二つの幸せは、互いに影響し合いながら深まっていくものだと考えています。たとえば、テストで点が伸びたことで「もっと上を目指したい」という意欲が生まれ、さらに高い目標を設定して学びを深めていく——そんな子どもたちの姿を、何度も私は見てきました。比較の中で生まれた喜びは、やがて内面から湧き上がる充実感へとつながり、それが主体的な学びを促します。内面の充実を土台にして挑戦を重ねることで新たな成果を生み出し、さらに深い喜びへと発展していくのです。このように二つの幸せがスパイラルのように作用し合うことで、学びは連続性を持ち、豊かに深まっていくと考えています。

「絶対的な幸せ」と「相対的な幸せ」は
学び続ける過程で連続性を持ち
豊かに深まっていく



“子どもの幸せ”は到達点にあるのではなく、
学び続ける過程そのものにあると考えます

歩みの中にこそ幸せがある

私は、この過程こそが真の意味での“子どもの幸せ”だと考えます。つまり、“子どもの幸せ”は到達点にあるのではなく、学び続ける過程そのものにあるのです。伸びたい・学びたいという強い意欲を原動力に、前へ進もうとする歩みの中にこそ幸せがあるのです。このような考え方と相通じる教育活動は、既に学校現場で広がっています。
小学校では、「どうしてだろう？」という素朴な疑問を調べて友だちと共有する「ミニ探究」や、学びの過程を記録して自己

成長を振り返る「ポートフォリオづくり」に取り組んでいます。中学校では、地域の課題を調べて改善策を考える「探究学習」や、自ら計画を立てて主体的に学ぶ力を育む「学びの習慣づくり」を進めています。これらの活動を通じて、「学び続けることの楽しさ」や「挑戦が自分を成長させる」という実感が深まります。その実感こそが、将来どのような状況に置かれても乗り越えていくとする力になると考えます。

学び続ける人生を支える「人とのつながり」

しかし、人は一人だけで学び続けられるわけではありません。迷いや停滞に直面したとき、そばで支えてくれる存在がいることで、再び前へ進む力が生まれます。その力は、日常のさまざまな場面で実感できます。たとえば、「友だちと協力して課題を解決したとき」「困っているときに友だちに助けられ、共に笑顔になった瞬間」「地域ボランティアで“ありがとう”と言われたとき」——こうした経験は、他者との関わりの中でしか得られない

温かな充足感をもたらします。支えられた経験は、「困ったときは助けを求めてもいい」という安心感につながり、次の挑戦へ踏み出す勇氣になります。子どもたちは、こうした「人とのつながり」を通して、「誰かを幸せにすることが、自分の幸せにつながる」という大切な感覚を身につけていきます。この感覚こそが、生涯にわたって学び続ける力の源になると私は考えます。

「ハーバード成人発達研究」が示すこと

「人とのつながりが幸せを支える」ということを裏付ける科学的知見として、「ハーバード成人発達研究」があります。幸福や健康、長寿に関わる普遍的な要因を探すための研究で、1938年に開始して以来、大規模な追跡調査を続けています。これまでの対象者は、2,000人以上に上ります。この研究をまとめた『グッド・ライフ』には、次のように記されています。

※『グッド・ライフ』ロバート・ウォールデンガー／マーク・シュルツ（著）、小島修（訳）、辰巳出版、2024年5月初版第5刷、79頁から引用。

変化が激しく、見通しがきかない時代と言われています。子どもたちが生きる未来は、私たち大人が経験したことのない世界になるでしょう。だからこそ、「多くの人とつながりながら学び続けることが、未来を切り拓く力となる」と、子どもたちに感じて

幸せな人生には、成長と変化が欠かせない。人は、年をとっていけば自然に変化し、成長するわけではない。経験し、耐え、行動することのすべてが成長の軌跡を左右する。**成長過程において最も重要なのは、人間関係だ。**自分の意欲をかきたて、人生を豊かにしてくれるのは、他者という存在だ。※

ほしいのです。そのために、“子どもの幸せ”をど真ん中に据えた教育の構想と実践が、これまで以上に求められていると強く感じます。次号（春号）では、一歩成長した子どもたちの実践事例をご紹介します。